37　幕末に招聘された外科医サヴァチェの医業績について

江沢　暁彦
江沢医院（神奈川県横須賀市）

徳川幕府は洋式軍艦の建造，補修を目的として，横須賀に製鉄所（造船所）を1865年に着工し，その建設は明治政府に引き継がれた．この建設をしたのは幕府から招聘されたフランス人（仏国人）技師ヴェルニー（François Léonce Verny）で，同行した外科医師はサヴァチェ（Paul Amédée Ludovic Savatier）であった．本文は横須賀製鉄所医療施設長および海軍軍医として地球規模医療（global medicine）を目指した仏国人外科医サヴァチェの偉業績を紹介する．

サヴァチェは1830年仏国のオレロン島生まれ，ロシュフォール海軍軍医学校卒業した後1852年海軍三等外科医として西インド諸島を歴訪した．1854年クリミア戦争に従軍し，1855年海軍二等外科医としてアジア南部，インドへ歴訪して仏国政府移民船で大任を果たした．この功績に対して仏国植民地大臣褒賞を受章した．更に中国の太平天国の乱，アヘン戦争で寧波，上海に寄港．1862年海軍一等外科医に昇任し1864年下関戦争に従軍した．この海外での十分な医療経験で横須賀製鉄所の首長ヴェルニーの推薦を受け，幕府が高待遇で招聘し横須賀製鉄所医療施設長として着任した．サヴァチェの任務は製鉄所内の防疫，「産業医」として日本人医師の指導と病院施設並びに医室管理経営を行い，ヴェルニーの相談役も果たした．

製鉄所工事の過程で多くの怪我人，疾病が発生し，サヴァチェは過酷な医療環境の中で製鉄所に働く仏国人とその家族の治療に当たった．製鉄所に教育機関「黌舎（こうしゃ）」が創設され「学校医」の任務も果たした．黌舎は工部大学校（東大造船学科の前身）に引継がれ，日本の技術を欧米と比肩できる人材の育成を果した．サヴァチェは製鉄所創設当初から仏国語が話せる元奥医師栗本鋤雲（箱館の官立病院創設者の一人）と親交を結び，横浜の仏国のジョレス病院の臨床医，その他地域の医師等と連係を持った．サヴァチェの助手医師に蘇山，石井宗純や村上伯英がいたが1873年当時，部下の日本人医師3人の指導，仏国人雇員（明治九年神奈川県統計資料には109名），製鉄所の判任官ら416名，職工1314人等に健康管理を行った．また防疫・産科助産士，出産証人証明書作成まで行った．当時は梅毒の予防が必須で「性病施設」の設置と治療や製鉄所外の「往診」も行った記録がある．診療は診療費，薬代は，常雇の職務上の病気・怪我は無料だったが，臨時雇は有料であった．また家族も有料で診療を認められ，「健康保険制度」の先駆けを実施した．日本の健康保険制度の採用は1922年．1874年中川義香（後の軍医少監）が横須賀製鉄所に着任し，サヴァチェから綿密な医療伝習を受け，1877年コレラ流行の検疫係でとして活躍し，1883年横須賀製鉄所医療施設長に着任した．

なお地域住民を外科治療で救命したことで地元有力者（小川茂周）から感謝状を付与された．1875年サヴァチェは外国人叙勲制度発布時に勲四等旭日小授章を受章し，帰国後ロシュフォールにて海軍病院を指揮した．サヴァチェは「海軍医師団の誉れ」と讃えられ，1881年軍医少監（Medicine de chef）に昇進した．その後セネガル国の黄熱病の医療とチリ・ペルー・北米サンフランシスコさらに南太平洋のタヒチを訪問して疾病等調査および医療活動を行なった．帰国後「医療地理学への寄与—太平洋の船舶基地」と題して仏国海軍軍医学雑誌の「マジェンヌ号航海記」は1879年海軍軍医学賞を授かった．更に海外における顕著な医療活動が評価されレジョン・ド・ヌール章を受章した．今で言うGlobal Medicineの先駆的業務を実践した．

以上の通り18～19世紀に発展した仏国病院医学を我が国において実践し，日本人医師に医術の移転を行った．その偉業績の一つとして国家公務員共済組合連合会横須賀共済病院の設立100年誌に，サヴァチェが基盤を構築したと記述されている．以上は仏国医術の日本に与えた影響について，サヴァチェの偉業績を通して，一国に偏重せず「グローバルかつ多様性を持つ」社会構築を見通す素材として紹介したが，更なる調査・研究を待ちたい．